

「生き方によって選びを示す～成熟編～ 知ることと、徳に生きる。」

Ⅱ ペテロ 1 : 1-5

「暮らしの手帖」の創刊者である花森安治は、父から言われた「大学に受かったら何もしない、でも落ちたら何でも好きなものを買ってやる」という言葉から、我が子が失敗した時や挫折した時、うまくいかなかった時にどう接するか、どんな言葉をかけるかを考えるようになりました。彼の父は、父親は子どもが上手くいかない時にこそ、そこに父親の役割があると考えていたのでした。神様は私たちが失敗したときの道を人間以上に父親として用意して下さいます。倒れても倒れっぱなしにならないよう、つまずいた時に起きられるように、その方法を与えてくれたのです。

「第2ペテロ」の主人公ペテロは、自分自身の失敗から出る改めを書きました。ペテロが大失敗をして、人生の後半で悔い改めて、優秀で知恵深く変えられていった話を学んでいきましょう。

■ 近視眼にならない目線

私たちはマイナス評価から物事を判断しがちです。それは「近視眼」です。親は、うまくいかなかったことや失敗をプラスに変えるために存在しています。聖書では、近視眼にならない目線を訴えています。悪いことをする子を悪いと思っはけません。ペテロは大失敗者でした。キリストを目の前で裏切つて逃げたのです。彼の人生は終わったのです。しかし、彼は変わりました。なぜなら、彼がその大失敗をした時にかかわった人がいるからです。大切なのは失敗した時、批判された時、うまくいっていない時なのです。その時に後悔するのではなく、どう思うかです。あなたは死ぬ準備ができていますか。私たちは生きる時間は元々定められています。しかし、それを見ません。まだ明日があると信じています。マルチン・ルターは、「明日世界が滅亡しようとも、私はりんごの木を植える」と言いました。やらなければならないと分かっているでも諦めてやれないということが多いためです。聖書では、「生きるのもキリスト、死ぬこともまた益である」と言われています。それは、失敗したあなたに諦めるなどということ伝えるために、諦めなかった人たちのストーリー（歴史）を書き残しているのです。キリストとは、救いをもたらすという意味で、救うということ、倒れた人の手をつかむということです。倒れかけた人が倒れてしまわないように、起き上らせるということです。彼は、言葉ではなく、生き様をもって、人々が起き上がる方法を残したのです。

■ 条件付きの愛から無条件の愛へ

ペテロの想いに立って、この第2ペテロを読んでいきましょう。十字架の過ぎ越しの夜、キリストが捕らえられて裁判にかけられる時、そつと後をついて行きました。ゲッセマネでイエス様が血の汗の祈りをしている時、起きて一緒に祈ってくれと言われたのに、寝てしまい、ペテロは失敗続きです。兵隊が押し寄せてきた時には、兵隊に剣をもって向かっていき、耳を切つてしまいます。するとイエス様はその兵隊の耳を治し、ペテロに「剣によって滅ぼすものは、剣によって滅びる」と言います。彼は今までの自分を否定されたと思ひ、どうしたらいいかわからないと落胆しました。そんな中、キリストが同胞によって闇の裁判にかけられます。剣を失った今、戦う道具のないペテロは、三度もキリストのことを知らないと言いました。「誓って知らない」そんな時、鶏が鳴き、イエス様が言った「鶏が鳴く前に、あなたは三度私を知らないと言うだろう」という言葉を思い出し、ガリラヤ湖に逃げ帰りました。そこへ十字架にかかったイエス様が来られ、責めることもなく「あなたは私を愛するか」と言われ「愛します」と答えました。これは兄弟愛(条件付きの愛)です。それがもしできたらアガペーの愛(無条件の愛)に成熟しようと言っているのです。

■ 主イエスを知ること

この手紙は、失敗者だと思っているディアスポラの人たちに、私の仲間である皆さんへとして伝えています。失敗と過去を認められる人は貴いのです。しかし、認めただけではうまくいきません。変わろうとしても何度でも同じことをしてしまいます。だから、私たちは神と主イエス・キリストを知ることが大切です。知識ではなく、体験して知ることが大切なのです。体験した人に唯一恵みと平安があるのです。ダビデは命を狙われ、砂漠で死に絶えそうなのにでも平安を見つげられることを知りました。これは、失敗とその失敗を乗り越えた人にしかわからない恵みです。不安を平安に変えられる方法は乗り越えられた経験だけです。だから解決できるのです。栄光は、何かを成し遂げた時に与えられる輝きです。苦難を乗り越えた人に与えられるのです。これは訓練で、その中であなたは徳によって学ぶことができます。栄光と徳をもって彼が成し遂げたことは、もし私たちがそれをするなら得られると約束しています。

■ 徳とは何か

栄光は、徳によって成し遂げられた人に与えられます。あなたはどんな状況になっても諦めずに向き合おうとすれば、絶対にうまくいきます。

『だから、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。』

信仰は、信じることを迎えるということで、唯一の決断です。なぜ信じられるかということ、自分が失敗したのに信じてもらったからです。我が子が失敗した時、近視眼にならないでください。間違つたことをしようとしている時、しばらく見ておく必要があります。自分で体験させて痛い思いをして初めて分かるからです。失敗者だと分かれば信じるのできるのです。だから信仰とは、信じることを決断する心です。神はアガペーなので、神様の方があなたのことを信じて、乗り越えられるように向き合おうとしています。あなたを信じた神がいるので、あなたも隣人や神を信じなさい。

また、聖書には「徳には知識を」と書かれています。あなたは元々は素晴らしく完璧につくられました。失敗した人があなたに与えられた最初のすばらしさ、本来の姿を見出します。あなたはその卓越性を知らなければなりません。無知であると徳が見出せません。知らないとその結果が分かりません。できないと思っている人が、主に向くと、本当の自分を見つげるんだということが聖書には書かれています。そして見つけたら、それによって変えられるのです。聖書に出てくる人はみんな失敗者ですが、みんな素晴らしいものに変えられていきます。あなたは徳があるということ知らなければなりません。徳が高いということは、自分が優越性をもっていることを知ったということなのです。徳を知っている人が最善に生きることで、徳を知ることさえできれば、徳が知識、自制、忍耐、敬虔、兄弟愛を生み出して、愛に向くと書いています。だからまずすることは「信じること」です。あなたの存在とあなたを愛してつくつた存在があつて、あなた自身に優越性があつて卓越性があつて、それを最善に進める方法が知識です。知識をもつということは、最善を探求するというです。それを聖書では「知恵」とよんでいます。欲はあなたに与えられた摺一性を無にして、プライドを与えます。人と比較して優れたものになりたいと思うのです。あなたは最初にどうつくられたかを知る必要があります。目を開いて自分の罪が清められた失敗者であることを知り、あなたに関わつた人たちも失敗者の同じ仲間であることを知りなさいと伝えています。どんな人も手遅れということはありません。本当の自分に帰るのに遅いということはありません。あなたにとっては敵かもしれない人と向き合うときに、自分自身と向き合うときにあなたの中にある本当の自分が見つかるかもしれません。

■ 最後に…

「死」は平等に訪れます。医師でありクリスチャンでもあつた日野原重明(ひのはら しげあき)氏の言葉を紹介します。

自分の命がなくなるということは、自分の命を他の人の命の中に残していくことである。自分に与えられた命を、より大きな命の中に溶け込ませるために生きていくことこそ私たちが生きる究極の目的であり、永遠の命につながるのだと思う。

私達のいのちの中にイエスキリストは住まわれています。だから私達が最善に生きようとするなら、その生き様は自分たちが居なくなつても周りの人の中に残ります。失敗と思えるようなこと、問題や困難を通してその中におられるイエスキリストを見出すことができます。その時に私達がどう生きるかです。だからこそ、自分の優越性をおとしめる、劣等感・失敗者と思つてしまう欲を自制することができるように、それらを捨て去りましょう。あなたは卓越した素晴らしい存在として神に造られたのですから。

(要約者: 浅野 恵子)

(2021年6月27日)